

Eureka IX

六年制通信 No.34 令和4年2月10日(木)号

Rainy days never stay.

この二年、コロナ禍のために、楽しみにしていた行事が次々と延期や中止になりました。調べ学習までしたのに急に目的地が変更になることも。ある日突然「明日からリモート授業をするから自宅にいなさい」と言われたり、黙食指導があったり、絶対に変わらないと漠然と信じていた日常に思いもよらぬ制限が加わりました。なかなか経験できないことですが、そんなことが何度もありました。しかし私は、たとえどんな状況であっても人は学ぶことができると信じています。学ばなければならないと信じています。環境のせいにして学ぶ姿勢を失っては絶対にいけません。環境に文句を言っても仕方ないことです。世の中には自分の力で工夫できることと自分ではどうにもならないことがあります。それを峻別することが大切です。そして、できないこと、自分の手に余ることに関しては諦めるしかありません。前に言ったかもしれませんが「諦める」というのは「明らかに見る」ということでもあります。投げやりになることを「諦める」というものではありません。君たちが **the educated** (教育を受けた者たち) なら理解できるはずです。コロナ禍以前も、私たちは自由に行動していたようで実に多くの制限の中で暮らしていました。ちょっと考えればわかることです。しかし、そんな制限の中でも私たちは自由に行動することができていた、そう思っているわけです。不自由に感じるのは、要は相対的な感覚の問題です。今は、確かに以前より制限が強くなりましたが、その中でできる自由な行動を創造していきましょう。

さて、感染予防については、いつも言うように、私たちにできることはマスクをつけること、こまめに手を洗うこと、黙食すること、換気をすること、大声で話さないこと、つまりそんなに難しいことではないわけです。誰にでもできるし、実際ちゃんと君たちは守ってくれています。立派です。マスクや手洗いの成果はしっかり出ています。私、六年制に異動になって9年目ですが、インフルエンザによる学級閉鎖のなかった冬は昨年と今年だけです。先生方もインフルエンザにかかっていません。空気感染の対策としてマスクや手洗いは有効なのです。ただ、私は今の1、2年生の顔をちゃんと見ていません。マスクをした顔しか見ていません。それが大変淋しく思います。いつか、素顔で挨拶ができるといいですね。

コロナ禍に限らず、悪いことばかりがそんなに長く続くわけではありません。「止まぬ雨はない」とか「明けぬ夜はない」とか聞いたことがあるでしょう。真っ暗で怖くて泣きたくなる夜があっても必ず明ける、雨でどこにも出られない日が続いてもいつか必ず止む、人生そう悪いことばかりが続くわけではないということですね。どんなに

苦しいことでも、いつか必ず克服できる。雨は上がり夜は明ける。そして雨が止んだ時、あるいは夜が明けた時を楽しみに、また元気よく歩き出す準備をしておくのです。

人間にはその力があります。ちょっと想像してみてください。長い長い雨が止んだ後、窓から外を見る。木々の緑は一層美しく映え空は青く澄んでいます。しかし、地面は水が溜まりぬかるんでドロドロになっています。窓から外を眺める。私たちは空を見るか木々の緑を見るかぬかるんだ地面を見るか、それを自分で決めることができます。これこそ神様が私たちに与えた能力だと私は考えています。私は、もちろん美しい緑が見たいし澄んだ青空を見ていたいと思います。ひょっとしたらコロナ禍は木々の本数を減らしたかもしれません。あるいは、君が見ようとする窓を小さくしてしまったかもしれません。しかし、外には何が見えるかと問われて「ぬかるんだドロドロの地面しか見えない」と答えるような貧しい心を、君たちには持ってほしくないと思います。若者は美しい心を育てなくてはなりません。自分の手で大切に育てなければなりません。汚れた地面を見て暗くなる暇はありません。窓から見える風景を君の未来だと思ってごらんください。美しい木々や青空を見たいでしょ。この比喩は、人は結局心の持ち方でどんな状況でも前向きになれるのだということを表しているのです。

これも前に書きましたが、「危機」という字の中に「ピンチはチャンス」という言葉が入っています。「危」はピンチです。「機」は機会の「機」ですからチャンスです。漢字というのはうまくできていますね。コロナ禍は経済や文化、そして教育を危機に陥れています。つまり、私たちにチャンスをくれた、そう考えていいわけです。不要不急の中にこそ、私たちの失ってはいけない大切な文化がたくさんあること、私はそれを学びました。学ぶチャンスをもたらったのですね。君たちも、自分の周りに、何かを気づくチャンス、何かを学ぶチャンスがあるはずですよ。よく考えてごらん。

今週のおすすめ

・中野量太 『湯を沸かすほどの熱い愛』 (文春文庫)

同名の映画を先に観ました。著者は監督でもあるそうです。双葉役の宮沢りえちゃん、昔、かわいかったなあ。それが母親役とは。娘役は杉咲花さん。「恋です！～ Yankee 君と白杖ガール」というドラマに主演していましたね。杉咲さんて、ものすごくいい役者さんですね。この映画を観て素人でもわかりました。

さて、お風呂屋さんを経営していた旦那が家出をしまい、アルバイトをして一人娘を育てていた母親がある日突然余命二か月の宣告を受けます。そこから主人公双葉がどのように生きたか、周りの人間にどのような影響を与えたか、少々お話のためのお話(双葉の過去など)を都合よく詰め込んでいる気はしますが、そんなに気にならないから大丈夫です。オダギリ・ジョーのダメダメぶりもいい感じです。ただ、あのラストシーンは、あれ、違法じゃないのかな。私には理解できなかった。

今回の推薦本は、映画を観た人はもう読まなくてもいいと思います。同じなので。両方楽しみたいのなら、まず本からです。それから映像を楽しんだ方がいいでしょう。

BGM は 井上陽水 の 夢の中へ でした…。